

血管病の最先端医療とデバイスラグ

～日本の医療をより良くするための提言～

大木隆生

慈恵医大 外科学講座チェアマン・教授

Professor of Surgery, Albert Einstein College of Medicine, NY

戦前は感染症が、そして戦後は癌が国民病だったが、21世紀は生活習慣病の時代だ。今では心臓病・脳梗塞などの疾患については、技術も発達し一般の認知や知識も確立されつつある。しかし、その中で見落とされているのが血管病だ。頸動脈狭窄症、腎臓動脈狭窄症、胸部と腹部大動脈瘤、閉塞性動脈硬化症などに至っては、認知度はまだまだ低いのが現状だ。

さらに日本では、欧米で使われている患者メリットが大きい血管病関係の技術や製品が、デバイスラグの問題で使えないというのは周知の事実で、また、日本では血管専門医も少ない。専門医の教育・育成とデバイスラグの解消は、急務の課題だろう。国民医療費の配分方法を見直ことはもとより、急性期医療分野へ、すなわち高度先進医療を提供している病院へさらに投資していくことが重要だ。

このフォーラムでは、日米で診療活動をしている医師として、マクロな視点で医療費抑制政策が及ぼす影響と弊害について、また、両国での経験を通じて感じた日本医療のいい所と悪い所について考えていく。